

シーン5

「やあ、020441番くん。調子は……うん、順調だね」

「おや、久しぶりの生声で刺激されたのか、射精量が増えているか。予想どおりプログラムのバリエーションの問題だな」

「バイタル値の変動はこれぐらいか。まずまずといったところか」

「装置との相性も良いみたいだね」

「ふむ、020441番の射精管理データはなかなか優秀だ」

「そうそう、元変身ヒーロだったね……今は単なる増強薬生産ユニットのひとつ、精液ミルクタンクではないが。くっくく」

「ただ生体ユニットだからな。メンテナンスも兼ねて、新しく作成した射精促進プログラムを試してみるところか」

「まずは試験前に増精剤を注入しなければ」

「ローションでたっぷり尻の窄まりをほぐしてと、んんっ、くっっ、もうアナルでも感じるようになってしまったのだな」

「ま、アナルパイプ型の薬剤注入装置を、毎日のように使っている以上は仕方がない、か」

「んん、んんっ、すぐに尻穴がほぐれて、指の二、三本は受け入れるようになっているな」

「優秀な部品だ」

「もう少し奥まで指でかき混ぜて、んんっ、精液量が増えているっ」

「ああ、指で前立腺を刺激しているせいかな、生産性が上がることはいいことだ。こちらの開発メニューもあとでプログラムしておこう」

「さて、増精剤用のパイプを押しこんで、んう、んうっ、装着完了だね。ゴムベルトしっかりと固定して……スイッチオンっ！」

「よしよし、体内に増精剤が打ちこまれているね」

「いい動きだ。刺激に反応してびくびくっとうねっているな」

「オナホ内の精液の吸い出しも終わって、保存容器の交換もすんだようだな。満杯になった容器はしっかりと世界征服の役に立てるから安心したまえ」

「では、新しい射精促進プログラムをインストールして、目が塞がれていてもわかるだろう。ふふふ、肌触りの再現度を更にかけてみたんだ」

「んっふ、電動オナホだけじゃないぞ。ほら、こうしてキミの胸を指で触れてる感触も再現できてるだろう」

「おやおや、乳首をちようといじつてあげただけでもう射精なんて、とても優秀な精液タンクだね」

「腰を可愛くへこへこさせておねだりとは、もう誰もキミを見て正義の味方だったなんてわからないだろうね。くっくく」

「それじゃあ、新プログラムを進めていくか」

「まずは手コキのコースだ。私の指の一本一本が竿をギョツと握ってるのがわかるだろう？ シュッシュ、シュッシュと勃起したキミのチンポをしゃがいて……まるで、乳搾りのように精子を吐き出してくれているね」

「バイタル値で一往復ごとに射精の快感が駆け抜けてるのがわかるよ……では、先程挿入したアナルパイプの強度を上げてみると……ふむ、予想通りの反応だな」

「前立腺への刺激との相乗効果が出てるようだね。ああ、思う存分、体をのけぞらせてかまわないよ。装置は問題ないように設計している。ゆつくりと、ゆつくりと……次は早く早くシコシコシコ……うむ、繰り返し試験は射精量の低下は見られないな。さすが020441番だ」

「それでは次のプログラムだな」

「バイタル値は一度上昇してその後は細かく変動と、ずれは予想した波形の5%以内に収まってるな。パイプリプログラムもなかなかの再現度だろう。柔らかさ、面積、刺激。私のおっぱいの感触を完全に再現してあげたんだよ」

「前のプログラムに比べると刺激的には弱い分類だが、精神的な刺激としては有用だね、その後の射精量の向上が見込めるんだ……私の胸に挟まれてガチガチに勃起したオチンポの肉とたゆんたゆんに揺れるおっぱいの肉がこすれるのを思い出してるのかな？ 更に射精量が5%ほど上がったよ」

「男性器の先端、鬼頭へ吐息がかかる感触も再現しているんだ……動きは緩慢になったがバイタル値は高い状態を維持しているな。いい傾向だ……020441番の頭の中では私の胸に思いっきり射精して白濁液で汚している妄想でもしているのかな。そうだな、ここは映像と組み合わせる刺激するのも効果的な手か。後で考えておくことにしよう」

「ふふふ、もう常人だと20回、30回程度の射精と同じ量を容器に貯めてるな。020441番はほんとに優秀な精液ミルクタンクに仕上がってくれたよ」

「サンプルを少し確認するか」

「キミにもはつきりと聞こえるように……じゅりゅつ、レロ、レロ……んっ♡んちゅ♡……じゅるる」
「ちゅぽ。うん、なかなかいい精子だ。量はもちろん、匂いも味も2桁以上射精した後とは思えないほど濃厚でこれなら問題ないな」

「自分の精液を味わう音がそんなに良かったのかな。勃起の強度が10%ほど上がってるよ。ふふふ、ホントにオチンポだけで考える生物になって020441番は私の被検体の中でも特に優秀な精液ミルクタンクだよ」

「それじゃあ、次に試すプログラムはキミも大好きな。足コキだ。こちらもラバーの感触まできっちり再現して仕上げてあげたんだぞ。しつかり、楽しんで上質な精子をどぼどぼ生産してくれたまえ……うん？ まだ足の指、親指の先が触れたただけだぞ……どびゅつとここまで聞こえてきそうなぐらい射精量を増して、そんなに気持ちよかったのかな」

「竿の付け根からゆつくりと鬼頭まで足でなぞって上げただけで、まるでマヨネーズのチューブを踏んづけたようにぶびゅぶびゅと精液をだして……これは聞くまでもないな。くつくく……雛鳥のような情けない声で、いいよ、かまわないよ。キミはもう020441番、人間ではないんだ」

「獣のように嬌声を上げてもいいし……人目をはばからずにビクビクツツと快感に身悶えていいよ」

「男性器全体をギュッと踏みつけてあげて圧迫してるのに、射精は止まらないのだね」

「いや、足を離れた途端、壊れた蛇口みたいに精液を吹き出して、想定以上だよ。ほんとうに、020441番は足でふまれるのが好きなんだな……かかとで玉袋を押しつぶして……くつくく、バイタル値が壊れたアンテナのように振り切れてるぞ。もう片方の足で乳首をつまむプログラムを動かしてあげよう」

「いいぞ、いいぞ。精液タンクらしく刺激を受けて精子を吐き出して、快感を得ることだけを考え、てキミはただの部品となるんだ」

「さっき空の容器に変えたのにもう半分以上020441番の精液で満たされてるぞ」

「まるで、餌をせがむ雛鳥みたいに口をパクパクさせて、昔のキミがこの姿を見たらなんというだろうね」

「裏切られた想い人の足の下でよだれタラタラ流して快感に抵抗する素振りすら見せずに、ただただ、白濁液を垂れ流す部品に成り下がって、くつくく、バイタル値が1%だけ上昇してるじゃないか。020441番にはこの方向の言葉も快樂につながる刺激になるようだな」

「この風景を録画して昔の職場に通信してやろうか？ ああ、とてもいい状態だ」

「ほら、口の中に020441番の精液で汚れた足先も再現できるのだよ。洗浄装置のように綺麗に舐め取ってみてくれ……おやおや、押さえつける足がなくなった途端、腰を浮かせて……まったく、とても職務に忠実だな020441番は」

「しかし、一番成果があるからと言って同じプログラムを連続するのも効率が悪くなる」

「本来なら、最後のプログラムは女性器への挿入プログラムで、他の検体はここで搾り取る流れだったのだがアクセント代わりにここで挿入するのもありか」

「んふふふ、バイタル値が激しく上下してるな。女性器の大陰茎に鬼頭の先がふれるぐらいでお預けされるのはそんなに辛いかい？ 020441番にはこういう焦らしプレイが効率的だと思つてね」

「入りたいかい？ 入りたいだろうね。あれだけ水撒機のようにびゅつびゅつて出してたオチンポがホースの先っぽをふんずけられたように膨れてビクビク言ってるのがわかるよ」

「……くつくく、バイタル値も最適な位置に来てるな、それじゃあ、ここで。プログラム、オンだ」

「おやおや、入れた途端に射精とはやはり020441番は優秀な精液ミルクタンクだな。しかし、これではプログラムの改良の具合を確かめる意味は余りなさそうだ」

「元気に腰をふつて平均以上の量を射精。まあ、満足するまでオナホに精液をぶちまけるといい」「1L、2L、3L、くつくく、他のユニットだと休止を挟まない連続稼働だと、とうに干からびている量だぞ。このポーズはバックで必死に腰をふてるのかな。とても情けない格好だが、問題ない。キミの仕事は精液を生産することなんだ。気の済むまでへこ腰を振り続けるといい」

「ふむふむ、なかなかいい結果だ。実際にこの量を子宮にしゃせしたら、精液だけでポテ腹を再現できてたな」

「おや、流石に限界が見えてきたかな。息もだいぶ乱れてきて、バイタル値も減少気味だ」

「大体のメンテナンスと確認は済んだのでここで今日は休止させてもいいのだが……ふふふ、キミの口先に差し出されてものがなにかわかるようだね」

「下がつていた男性器、おちんちんの硬度が一瞬で最高値に達しよ」

「今回最高の再現度だろう？ ラバーズーツを脱いだ私の生足。感触はもちろん、匂いも湿度も味もきっちり作り込んだのだよ」

「くつくく、私にはただの汗まみれの足に価値は見いだせないのだが、020441番には最高のこの褒美のようだね。まるで、盛の付いた犬のようにペロを出してしゃぶりついて……これは、最後までしっかりと搾り取ってあげないといけないな」

「ほら、両の足の平でぐりつと、くふつ、よく出るよく出る。先程の最大値と変わらない量だ……玉の方を踏んであげると悶えるように狂い喜んでどびゅどびゅと精子を出して……竿を中心に体重をかけるとびゅるるるっと快楽にはねて精液を撒き散らすなんて、ほんとうにふまれるのが好きなのだな」

「ムレムレの親指と中指で挟まれてしごかれるのがそんなにいいのか。バイタル値が高止まりでもう測定範囲外だぞ……キミの頭の中ではおちんちんを私の足に押し付けて快楽を貪るのかな」

「ああ、思う存分楽しみたまえ」

「キミ、020441番はそのため存在しているんだからな」

「データーの中の私にモノあつかいされて、へこ腰情けなく腰を動かして、精液を製造するだけの存在。ふふふ、020441番は私の最高の作品だよ」

「シシシシッ、シシシシッ♡ イってイっていき果なさいっ！」

「もう、容器が満杯か。さすが、020441番だ」

「だが、やりすぎてしまうと、生体ユニット020441番の耐久性が心配だな」

「減価償却が済む前の壊れてしまつては、組織に金銭的な損害が出てしまう」

「ま、ほどほどにしておくか」

「ああ、この音声もデータとして保存して、たまに流してあげよう。もしかしたら、すでに何回か流れたあとかもしれないけどね」

「君にはどちらでもいいだろう？」

「これからも精子製造ユニット020441番として、しっかりと頑張ってくれたまえよ、くっくくくく」